

シベリア帰りの苦難

静岡県 溝口平二郎

戦後シベリアに抑留されてから九十一年後、すなわち昭和三十一年六月九日舞鶴上陸、祖国日本に生還した元陸軍々人です。人民大衆を国家の生産用具なりと規定して徹底した重労働奴隷扱いで搾取を欲しいままにしているソ連邦、このシベリアで、強制労働と飢えに耐え切れず獄野に屍として捨てられた八万余の日本人同胞の中で、かろうじて生還し得た者の一人が私です。

私が生還を許されたのは、その当時国際的にシベリア抑留問題が騒がれ始めたので、ソ連邦としても考えなければならぬ情勢になっていたので。私はそのとき、シベリアの山中で森林伐採作業中切り倒されたきた大樹に直撃されて重傷を負ったので、ソ連邦の医療が及ばず祖国日本に送還することに決定し、臨時裁

判によって、元来無実の罪で二十五年の刑を科したものであるとして無罪放免の判決を言い渡されたのである。私は生死の境を彷徨しながら担架に乗せられたまま送還され、舞鶴へ上陸入院、ベッド上の人となったのです。医師たちからは「これは重傷だ、今動かせば死ぬ」と宣告され、そのまま一カ月。どうせあと、二、三カ月の生命だ、故郷の親もとへ帰し別れを告げさせようと、再度担架のまま三等客車で、入営渡満以来二十年ぶりで生まれ故郷の静岡県に生還できた男です。

故郷でも医師から見放される

医師たちから「傷口からの化膿菌で左上半身が侵されていて、損傷部位の切除をしなくてはならない。しかし菌は除けるが、切開手術に耐え得る体力を回復させることは困難だ」と、ここでも西洋医学の医師たちから見放されてしまった。

何くそ死んでなるものか

私は何としても生き抜きたい一点張りの信念で、西洋医療でだめなら、他の方法で手術に耐え得るだけの体力回復ができるよい医療はないものかと、病床にあ

つて妻子、親族を動員して資料収集に努めた結果、ついに見つかった。それは森下敬一医学博士の食養学と伊藤賢治理学博士の電子物理学に基づく電子療法と併用しかない。私は早速両博士の指導どおり、自宅、しかも自分で自分に対して治療を開始し、体力の回復に全力を挙げた結果、ついに軽作業ができるまでに回復成功した。

父母の心

今度は生活費の問題に悩んだ。私は舞鶴上陸時、政府から一万円也の見舞金をいただいただけ。いつまでも民家の物置小屋の中での療養生活もできないので困っていた。そのとき私の名義の土地が少しあることが判明した。調べてみると、私が現職当時、毎年もらうボーナスを故郷の父母に送金し続けて「百姓仕事での泥の身体を洗うように温泉旅行に行けよ」と言ったお金を、父母は一文も使わず私の名義で土地を買ってあったことが判明した。わが子の将来を思う親心、私はありがたくいただいて、その後の永住地として現在の掛川市内に転地したのである。その父母も今は仏であ

る。親戚の人たちの支援で小さな引揚げ住宅を建てたのです。

シベリア帰りは恐ろしい人たち

今度は就職して生活費を得なくてはならないので、就職口を探し回った。その矢先、私の新宅の隣に掛川市立病院が新設されることを知り、早速掛川市役所に赴き、シベリア帰りの事情を説明した上、食うに事欠くので事務員でもまた掃除夫でもいいから新病院で働かせてくれと懇願した。受け付けた市民課は一応引き受けて履歴書を受け取った。その後市立病院の建築完成近くなつて、新規採用の勤務員決定の公報が発表された。しかし私の名前はない。私には採否の何らの通告もなく捨てられていたことが判明した。

シベリア帰りでどんな赤い思想に変心しているか知らない者は危険人物として除外したということが本当らしい。そのときつくづく、シベリア帰りの民主運動家たちが播いた悪種の被害を受けて困り切っているところへ、更に長期抑留者がやって来たので、こやつはさらに一層真つ赤に磨き上げられた極左革命闘士であ

ろうと内心思い込んで警戒していたのであろう、と気づいた次第です。

警察官も私を疑っていた

私が自宅へ戻っていると、間もなく私服の刑事が二人私を訪ねてきた。私は先手を打って「あなた方刑事さんが私の家へ来られた真の目的を私から申し上げてみよう。あなた方は市役所から通報を受けて来られたのですね。私をシベリア帰り、即ち共産社会主義思想に洗脳された悪人ではないかと思つて職務上監察に来られたのでしょうか」と申し上げたところ、彼ら刑事は驚いた表情で「全くそのとおりです」と告白しました。

最初から絶対的に反共反ソで押し通した連中。それと洗脳運動家から見て邪魔になる憲兵、警察官、軍の参謀級、満州国協和会幹部、鉄道局長、その他官公庁の長官など、反共分子として最初からソ連官憲に通報して科刑せしめられた連中。この人たちは有無を言わず全員がソ連国内法で二十年、二十五年という恐るべき刑を科せられ、ラーゲリ（強制労働収容所）に投獄され、長期にわたつて強制された人々たちです。即ち

十一年、十二年後にかろうじて生還した人々、この人たちは帰国後「朔北会」という親睦会を結成しています。

粗衣粗食の上、ノルマで束縛された重労働の連続で疲れ切つた抑留部隊員を、毎夜集合させてマルクス・レーニン主義唯物論を講義し、筆記試験で白紙提出者や文句を言う者は大衆の前で日本人同士で吊し上げ、死の苦しみを与えられ、死に追い込まれる者あり、またソ連官憲に渡されて二十五年の重労働刑を科せられラーゲリで死の苦しみを味わされる者あり、シベリアでの流刑は全く悪魔の地獄であつた。

天皇制ボタモチ

シベリア民主運動の指令が来て、これに従つて抑留者各部隊が赤旗も振り出したとき、私は「お前たち、祖国日本を敵に回す革命運動がよいなら、永久にソ連に残つてスターリンのくそパンを食つて重労働をやればよい。おれは祖国日本に帰つて天皇制ボタモチを腹いっぱい食べるぞ」と叫んだために、私はソ連官憲に通報され、有無を言わず二十五年の重労働刑を科せ

られラーゲリに叩き込まれた。そして私はシベリアの西から東、南から北へ転々と十五カ所もたらい回しにされたが、行く先々で私の知人たちから「お天皇制ボタモチ、まだ生きていたか」と抱きつかれた。シベリアにおける私の綽名は「天皇制ボタモチ」となってしまった。

自力営業に踏み切る

自宅で自分の力で何かよい仕事はないものかと考えた。ああそうだ、シベリアから生還した当時、西洋医学から見放された重度傷害から自分を救ってくれた食養学に基づく食事療法の指導と電子物理医学を活用した電子療法の併用を、成人病、慢性諸病で苦しんでいる市民に応用指導して健康へ導くことを私の使命なりと思つて、県知事に届けて掛川電子健康クラブという看板を掲げ、そして多くの人々を病苦から救い出すことに成功しました。

そして私自身も、引揚げ時から八年目に至り手術に耐え得る十分な体力を回復できたので、再度入院手術台の人となり、十時間余りかかって大量の輸血に助け

られつつ手術に成功、左側肺全摘出。左側肋骨五本切除、心臓に癒着していた横隔膜剥離というまれに見る大手術にも成功。七カ月入院しただけで、今は現在まで三十一年間一日も休まず、セルフメディケーション（自己治療）による健康法も業として八十二歳を迎え、掛川市傷痍軍人会長として今なお尊い生命を守らせ、また守っております。

私は、戦後のシベリア抑留十一年間からかうじて生還した後も苦難の連続、そして現在天下を取った気持ちになれるはずなのに、最後までつきまとう悲しい思い出があります。それは、終戦後ソ連軍が満州に侵攻してきて掠奪・強盗・強姦・殺人をほしのままに暴れ回った中を、ハルビン市から妻子を南方に避難させた。そして私はシベリアに不法抑留の運命をたどったのだが、ソ連軍に追われ逃避行中、長女佳子（当時満二歳）が逃げ切れず、ついに死亡。今なお満州の地に放置されていることです。

私は仏壇に飾られてあるあどけない佳子の遺影を眺めながら、一生懸命死んだわが子の年を数えてはお経

を上げております。

平成六年六月記

【執筆者の紹介】

大正二年二月二十四日 静岡県小笠郡土方村（現在大

東町）嶺向一五七にて出生。

昭和五年三月二十八日 私立双松学舎（旧制中学校）

卒業。

昭和六年四月一日 静岡県庁山林課に就職、大幡野原

有林事務所勤務。林業手、森林の相測量技術業務、

植林事業監督、会計事務等に従事。

昭和八年 徴兵検査合格。

昭和九年一月十日 豊橋歩兵第十八聯隊機関銃隊に入

営。

同年四月、聯隊とともに満州派遣佳木斯北境地区防衛

隊第一大隊第一機関銃中隊所屬。

昭和十年八月 憲兵科に転科し、関東憲兵隊哈爾濱憲

兵隊勤務。

昭和十六年十二月 平房憲兵分遣隊長。

昭和十八年十二月 哈爾濱憲兵隊本部戦務課防護班長、
情報班長勤務中、終戦。

ソ連軍が満州へ侵攻した以後は、在満州居留民保護
のため市内外治安維持に出勤。

昭和二十年八月十八日 隊本部がソ連軍に包囲され武
装解除。ウラジオストク經由日本船にて祖国日本
へ帰還というソ連軍司令官の指示に従い貨物列車に
て哈爾濱発。沿海州ウオロシロフ収容所に監禁され、
同年八月二十三日、ハバロフスク經由シベリア本線
を西行ウラル山脈タウダ収容所に不法抑留された。

昭和二十二年七月 沿海州ウオロシロフ極東軍事裁判
においてソ連邦国内法第五十八条反共の罪にて懲役
二十五年の実刑を受け、シベリア各地のラーゲリに
おいて強制労働に酷使され続けた。

（静岡県 石川 博）